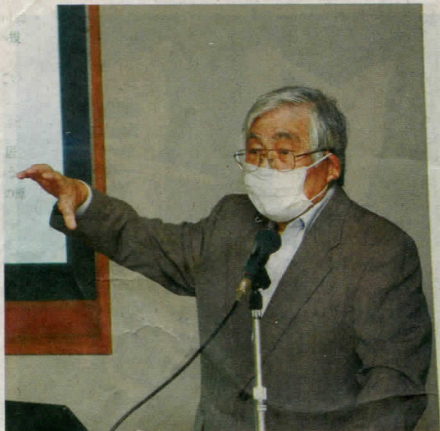


尖石、与助尾根「重要な遺跡」

茅野で
縄文セミ
勅使河原さんが講演

茅野市尖石縄文考古館は10日、第1回縄文セミナールを同館ガイダンスルームで開いた。第2回尖石縄文文化賞受賞者の勅使河原彰さんが講師を務め、今後の縄文集落の研究でも同市の尖石、与助尾根遺跡の発掘成果がもたらす意味の大きさを伝えた。

勅使河原さんは講演で縄文時代の集落研究の歴史や在野の考古学者、宮坂英弉氏（みやざかひでゆき）、初代同館長、



尖石、与助尾根遺跡の重要性を説く勅使河原さん

県考古学会
初代会長（はつだい）が
行った住
居跡の発掘
が学会に与
えた影響な
どを紹介。
宮坂氏は1
940（昭和
15）年に

尖石遺跡で第1号の住居跡を発掘した後、42年までに計32の住居跡を発掘した。尖石、与助尾根遺跡での発掘成果から研究者によって中央の広場を囲むようにして住居が環状的に配置された環状集落論が提唱され、縄文集落の研究で大きな影響を与えた。

ところが、高度経済成長に伴う70年代の活発な国土開発によって開発前に行われる集落遺跡の発掘調査例も増加。環状集落論に対する見直し論が強まった。現在は縄文時代の標準的な集落は住居数が3棟前後という考え方で環状集落は人口密度が極めて高い地域の極めて高い時期に存在したとされている。勅使河原さんは人口密度が極めて高いとされる尖石遺跡、与助尾根遺

跡について「縄文社会を解明する上でますます重要な遺跡になる」と語った。

次回は10月ごろの予定。

（野村知秀）